

不定詞／動名詞の選択に関する原理的直観の習得

Acquiring the Principled Intuition behind the Process of Selecting a Gerund or a To-infinitive as the Complement of a Verb in English

佐藤芳明

Yoshiaki SATO

慶應義塾大学

Keio University

Abstract

This study explores how Japanese learners of English approach the task of selecting a gerund (doing) or a to-infinitive (to do) as the complement of a verb. The research questions included: (1) With a set of verbs classified into four semantic types, which type of verbs are most problematic for learners when making a gerund/to-infinitive distinction? (2) How does the level of learners' language proficiency affect the process of choosing the right complement? (3) What are possible learning strategies Japanese learners tend to employ when approaching the task in question? (4) Does the learners' general understanding of the gerund/to-infinitive selection influence their choices? The participants were 62 Japanese university students. Among other things, it was shown that there was a persistent and pervasive error tendency in the semantic type of verbs including *suggest*, *consider* and *imagine*. The results suggest that cognitive linguistics may prove a valuable help for language teachers wishing to increase their explanatory power in their account of the difference between gerund and to-infinitive constructions.

Keywords

Gerund, To-infinitive, Language Acquisition, Semantic Motivation, Persistent Errors

1. はじめに

英語には、動詞の目的語として動名詞あるいは不定詞をとるという仕組みがある。動詞によっては、いずれか一方のみを可とするもの、いずれをも可とするが意味が著しく異なるもの、またいずれも可として意味的差異も微小であるものがある。英語母語話者にとって、その選択は特別な困難をもたらすものではない。この種の文法的な判断力は母語話者が無意識に獲得する言語直観に含まれているからである。しかし、非母語話者にとっては事情が異なる。第二言語(この場合、英語)学習者にとって、目的語として不定詞か動名詞のいずれが適切かという判断はむずかしく、動詞ごとに個別事例を習得することも容易な

ことではない(Hornby, 1976)。実際、動名詞または不定詞を用いる構文は、EFL 学習者がしばしば混同し、上級学習者でさえ常に誤りをおかす傾向があることが報告されている(Petrovitz, 2001)。

筆者自身も、日本における英語教育の経験を通じて、学習者が *I've been considering to visit him.* や *I suggested to put off the party till next week.* などといった誤用を頻繁にすることを目の当たりにしてきている。*consider* と *suggest* は、動名詞を目的語にする動詞であるにもかかわらず、学習者はこれらの動詞を不定詞とともに使ってしまう傾向が観察される。

本研究では、そうした誤用は日本人英語学習者の間でどれほど根深く広範囲に及ぶ(persistent and pervasive)ものなのかを検証することを第1の目的とする。そして、想定可能な原因については2つあるというのが筆者の考えであり、この想定 of 妥当性をチェックしようというのが第2の目的である。その原因の1つと関連して、例えば Hornby(1976)は、動詞の構文習得の重要性とその難しさに言及して、学習者は「*intend/hope/want/propose to come* などの用法を見聞きしているために *suggest to come* と表現してしまうのかもしれない」と述べている。この指摘は示唆に富むものである。ここに列挙されている *intend, hope, want, propose* はいずれも「未来志向的」な意味合いを帯びる動詞で不定詞と共に起るものだが、*suggest* や *consider* は未然の行為に言及できるという点でこれらの動詞と意味的に類似の傾向性が認められる。だとすれば、「意味論的な類似性(未来志向性)」が学習者に誤った形式的な推論を誘発させる要因となっているという可能性が考えられる。

2つ目の要因として、指導・学習の仕方(学習方略)が影響していると考えられる。第二言語習得のプロセスは明示的指導によって加速するものであり(Ellis, 2005)、いかにして明示的学習による効果を最大化するかが第二言語習得論における争点の1つとなっている(DeKeyser & Juffs, 2005)。がしかし、ここで問題となるのは、「明示的指導」の中身である。明示的な文法指導といっても、意味的動機づけ(semantic motivation)を考慮せずに機械的な規則として情報を提示する方法は負の効果を生む可能性がないだろうか。初期段階における従来型の断片的な文法指導に関して、Lantolf(2007)は以下のように述べている。

More often than not, formal linguistic knowledge is presented... in a piecemeal, rule-of-thumb format rather than as coherent and theoretically informed conceptual knowledge. Rules of thumb are not necessarily wrong, but they generally describe concrete empirical occurrences of the relevant phenomenon in a fairly unsystematic fashion and, as a result, fail to reveal deeper systematic principles. (Lantolf, 2007, p. 36)

すなわち、本研究では、「意味的類似性」と「指導方法」の2つが不定詞／動名詞選択の問題の困難さの要因になっているという仮説を立て、この仮説の妥当性を示すデータを学習者から引き出そうとするものである。

以上まとめると、本研究は以下の問題について明らかにしようすることを目的とする。

- ① 日本人英語学習者にとって、動詞の目的語としての不定詞(to do)/ 動名詞(doing)の選択において、どのような動詞に続く場合が困難であろうか。
- ② to do/doing の選択の難しさは、異なる英語習熟度レベルの学習者の間で質的・量的に異なるであろうか。
- ③ 学習者は to do/doing の選択について、どういう形で指導を受けて(学んで)いるであろうか。
- ④ 学習者の理解の仕方が to do/doing の選択の仕方に影響を与えているであろうか。

2. 研究の方法

本研究を進めるにあたり、英語を比較的苦手とする(TOEFL PBT \leq 479) 日本人大学生32名(M=21 ; F=11)を対象に質問紙による予備調査を行った。具体的には、suggest, enjoy, start, promise, avoid, finish, consider, refuse, remember, forget, hope, deny の12の動詞に関する設問を設け、以下の形式で目的語の選択を求めた。

He suggested [] the meeting till next week.

(彼は会議を来週まで延期することを提案した)

1) to put off 2) putting off 3) to put off も putting off も両方可

すなわち、動詞の目的語にあたる to do/doing の選択を三択一(to doのみ可 ; doingのみ可 ; to doとdoingいずれも可)の形式で問うものであった。設問の文脈を理解しやすいように完成された英文の内容に対応する和文を施した。回答時間は即興的な判断を重視するため5分間と定めた。

予備調査の結果を受け、問題の所在を明らかにした上で、本調査を実施した。本調査では、62名の日本人大学生(M=33 ; F=29)を対象に質問紙に回答することを求めた。質問紙は、基礎データ(年齢/性別/英語力に対する自信度など)、レベル判定のための語彙識別力テスト、それに新たに選定した12の動詞を扱う不定詞/動名詞選択テストの3部からなる部分と、学習方略(learning strategies)を問う部分の構成であった。

語彙識別力テストは、簡便に学習者のレベルを判定するためのものであり、頻度情報・意味情報を考慮して難易度を調整した30の形容詞を3つのレベル(各10問)に分類し、それぞれのレベル内で日本語との対応をマッチング方式で求めるものであった。このテストの得点は TOEFL の得点を持っている学生に対してのみ相関をみたところ正の相関が認められた($r=.417$, $p<.005$)。

質問紙の中心となる12の動詞についてであるが、選択したのは、suggest, mind, promise, avoid, imagine, consider, refuse, remember, hope, regret, miss, deny である。これらの選択の基準としては、to do か doing の一方の選択を要請する動詞であることを考慮し、以下の意味タイプに分類した。

11. to do は、まだしていないことを表す

12. to do, doing の用法について、特定の方法で教わったことはない

これら12の選択肢のうち、{1, 4, 5, 6, 7, 8, 10, 11} は、日本の英語教育環境で一般に普及していると想定される指導・学習の仕方である。これらは、リスト式学習(1)、文法用語に基づく分類法(8,10)、書き換えによる方法(6)、動名詞に関する意味的解説(4,7)、不定詞に関する意味的解説(5, 11)などが含まれている。一方、一般には指摘されていないが、動詞の目的語としての不定詞/動名詞の選択を指導する際には、本質的と筆者が考えるものとして{2, 3, 9}を選択肢に加えた。

以上、本調査は、基礎データ、語彙力判定テスト、to do/doing の使い分けテスト(自信度判定と選択の根拠を含む)、そして学習方略を問う内容となっており、20分間の回答時間を与えて実施した。

3. 結果と考察

予備調査の目的は、日本人学習者にとって英語の動名詞と不定詞の選択は難しいものであろうかという問いに対して、実証的な手がかりを得ようとするものであった。詳細を分析するには値しないが、注目すべき結果としては、suggest(12.5%)とconsider(25.0%)が際立って正答率が低く、enjoy(90.6%)のみが高く、その他は平均すれば60%程度の正答率であった。

3.1 全体的傾向

本調査では、動詞の意味タイプを考慮しながら12の動詞を厳選し、設問を作成し、英語力レベルに応じてどういう傾向性が見られるか、また、学習者の誤答傾向は彼らの学習方略(学習の仕方、教わり方)から説明できるものであるかを検証することをねらいとした。

まず、12の動詞の項目別難易度を示すと、正答率の高い順に以下のようなグラフが得られた。

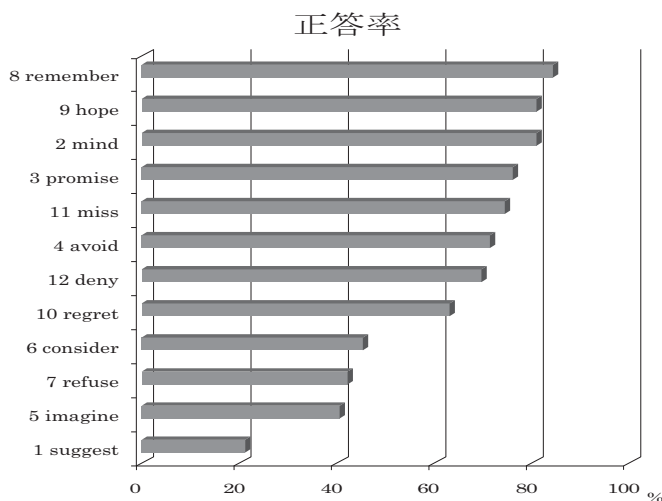


図1 動詞別正答率

意味タイプ別にみれば、ここでは B1に属する動詞(suggest, consider, imagine)が、正答率が最も低い4つの項目の中に含まれていることが見てとれる。意味タイプ別(A, B1, B2, C)に、正答率平均を比較してみると、以下のようになる。

意味タイプ別分類	正答率平均(%)
A [remember, regret, deny]	72.4
B1 [suggest, consider, imagine]	35.5
B2 [avoid, miss, mind]	75.2
C [promise, hope, refuse]	66.1

総じて、正答率の平均値が80%に満たないということは、この調査に参加した学習者の場合、不定詞／動名詞の選択基準は十分に習得されているとはいいがたい。その中でも、35.5%という低い数値であった B1 は日本人の“trouble spot”と呼んでもよいように思われる。意味タイプの A と B2は、相対的に習得されやすい動詞であるといえよう。その理由として考えられるのは、意味タイプ A の場合、動名詞を従えて過去になされた行為に言及するものであり、意味タイプ B2の動詞は「～していることの想定」を表す動名詞を導くものの、想定される行為が否定的にイメージされるものである。B1の動詞の場合、想定される行為が肯定的にイメージされることから、「これからすること」が強く連想され、不定詞が選択された可能性がある。一方、B2では、行為が否定的に想定されるために、「これからすること」の連想は抑制され、結果的に動名詞の選択が誘発されたのではないかと思われる(もちろん、それ以外にも用例暗記という要因も考えられるが)。

意味タイプ C の動詞は、未来志向の不定詞のみを従えるものだが、promise(75.8%)、hope(80.7%)に対して、refuse(41.9%)の正答率が際立って低かった。これについては、以下のような推論が可能と思われる。He promised to call me, but he didn't. や I hope to see you again soon. における不定詞の用法と比較して、Why did you refuse to accept such a generous offer? では、たしかに未来(未然)の事柄を想定している点で共通だが、前二者(promise, hope)では行為の「遂行」が肯定的に想定されるのに対して、後者(refuse)では「拒絶」の対象として行為が否定的に想定されるという相違がある。「未来志向」といっても、行為の遂行が肯定的に想定されるか否かによって、動詞の目的語情報における不定詞の習得に影響が生じるという可能性がある。あるいは、avoid doing(～するのを避ける)という意味的に類似した動詞に関する先行知識に影響を受けている可能性も考えられる。すなわち、「拒絶する(refuse)」も「回避する(avoid)」と同様に、行為の遂行が得られない状況を示すという点で意味的類似性がみられるのだが、それを形式的類似性にも対応させようとして、avoid が動名詞を用いるのであれば refuse もそうであろうという具合に推論を働かせたケースもあったのではないかという解釈も成り立つだろう。

3.2 英語習熟度レベルによる相違

次に、英語習熟度レベルと正答率の関係についてであるが、語彙識別力テスト(30点満点)の結果は平均が15.0(SD=6.02)であった。ここでの得点を尺度として以下のように3つ

のレベルを設定した。

語彙識別力テスト

I 0～12点 (n=19)

II 13～20点 (n=30)

III 21～30点 (n=13)

さて、12の動詞についてレベル別の正答率をグラフ及び表で示すと以下のようになる。

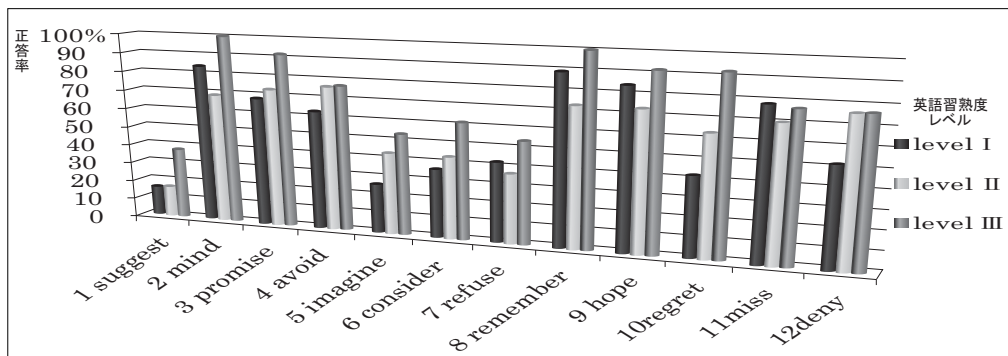


図2 習熟度レベル別正答率

表1 習熟度レベル別正答率

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
III	38.5	100.0	92.3	76.9	53.9	61.5	53.9	100.0	92.3	92.3	76.9	76.9
II	16.7	69.0	73.3	75.9	43.3	43.3	36.7	73.3	73.3	63.3	70.0	76.7
I	15.8	84.2	68.4	63.2	26.3	36.8	42.1	89.5	84.2	42.1	79.0	52.6

注：表内の(小数点第一位を含む)数値単位はパーセント(%)。

3つの習熟度レベルの各平均正答率は、以下の通りであった。

レベル I： 57.0%

レベル II： 59.6%

レベル III： 76.3%

レベル III の正答率は、設問11でレベル I を下回るのを除けば、全般にレベル I&II 以上であり、習熟度レベル I&II と III の間の相違は、不定詞／動名詞の使い分けにも相応に反映しているということを示している。しかし、英語の母語話者であれば躊躇なくすべての項目で100%の正解が可能であること(調査実施前に日本の大学英語教員である母語話者2名に確認を行った)を鑑みると、総じて、習得の度合いは高いとは言いがたい。また、レベル I とレベル II の間では正答率の高低が逆転するところもみられ、習熟度レベルが不定詞／

動名詞の使い分けの習得度と常に対応しているとは言えないことを示している。

レベル差と設問項目との関係でみると、以下のタイプに分けてみる事が可能である。

- (1) レベル差の影響をある程度受けるものの概して to do/doing の使い分けの習得が比較的容易であろうと思われる項目：2 mind, 3 promise, 4 avoid, 8 remember, 9 hope, 11 miss, 12 deny
- (2) レベル差の影響をある程度受けるものの概して to do/doing の使い分けの習得が困難であろうと思われる項目：1 suggest, 5 imagine, 6 consider, 7 refuse
- (3) レベル差が正答率に顕著に反映している項目：10 regret

(2)の中には、意味タイプ B1の動詞3つに加えて、refuse が含まれている。refuse については、上に述べたように、不定詞が示す行為が否定的に把握されるということが習得の難しさにつながっている可能性が考えられる。

3.3 学習方略と誤用との関係

ここで、不定詞／動名詞の使い分け習得度と学習方略(学び方、教わり方)との関連性についてみてみたい。提示した12個の方略の中で最も高い回答率を示したのは、以下の2つである。

- ・「to do をとれる動詞・doing をとれる動詞のリストを通じて」(66.1%)
- ・「to do は、未来志向の意味合いをもつ」(66.1%)

これらから、不定詞／動名詞の選択については、どの動詞がどの目的語をとるか覚えるといったリスト式学習に依拠する傾向が強いということと、「不定詞には未来志向性という特徴がある」という理解が学習者の間で広く知られているということを読み取ることができる。また、学習方略として「doing には、動名詞と(現在)分詞の2つの用法がある」(59.7%)を挙げた学習者も6割近くいたが、これはいわゆる文法用語に基づく ING 形の用法分類であり、この種の分類法的なアプローチが学校現場では比較的多く採用されているということが示されている。

その他、4割超の回答が見られた項目として、以下の学習方略がある。

- ・「動名詞の doing は、過去志向の意味合いをもつ」(46.8%)
- ・「to do は、名詞的用法・形容詞的用法・副詞的用法に分類される」(43.6%)
- ・「to do は、まだしていないことを表す」(42.7%)

ここで注目すべきは、「動名詞は過去志向性を有する」という理解の仕方である。この理解からは、B1タイプの動詞(suggest, consider, imagine)は動名詞を目的語としてとるという正しい判断は得られない。しかも、「動名詞は過去志向性を有する」という理解は、言語学的に正しくない。それにもかかわらずそういう理解が広く共有されているということは、未来

志向の不定詞との対比を明確にするため、動名詞を過去志向的としたものと思われる。たしかに、Remember to call her. と I remember talking to her over the phone. の場合は、「未来志向的」対「過去志向的」という構図は有効である。ただし、この構図は、動詞 remember が、未来へ向けての記憶の保持と過去からの記憶の想起のいずれをも表し得るという(動詞の)意味特性に依拠するものであり、不定詞と動名詞の意味の本質にそなわる属性から来るものではない。

一方、以下の項目は、皆無ではないにしろ、参加者の選択率が相対的に低いものである。

- ・「動名詞の doing は、名詞概念であるため時間的に中立的である」(1.6%)
- ・「to do(不定詞)の to は、前置詞の to と意味的につながっている」(14.5%)
- ・「to do は動詞的性質が強く、doing は名詞的性質が強い」(16.1%)

これらは、後述するように、筆者が不定詞と動名詞を認知論的な観点から原理的に説明する際に鍵となると思われる項目であるが、こうした理解は広く共有されてはいないようである。

3.4 「不定詞／動名詞」選択における自信度とその根拠：suggest を事例にして

ここでは誤用が目立った動詞 suggest のケースを取り上げ、学習者の選択がランダムに行われた結果の誤用なのか、意識的な選択によるものなのかを見ていきたい。このことを確認するため、本研究では自信度の判定を求めた。

さて、suggest については、予備調査の場合と同様に、正答の動名詞を選んだ21%に対して、74%の人が誤答の不定詞を選択した。選択の際に、各自、自信の度合いを6段階の尺度上で示すように求めたが、相対的に自信があるという者と、相対的に自信がないという者が各約50%と相半ばした。誤答であるにもかかわらず、相対的に自信があるとした者が約半数いたことは注目に値する。自信があるということはなんらかの根拠があるということであるが、その根拠は何か、という問題が出てくる。想定できることは、彼らがつまみ学習方略(学び方、教わり方)がその根拠と連結しているということである。

本研究では、学習方略を12項目挙げ、参加者に任意に選択させた。ここで注目したいのは「リスト式学習」という項目である。というのは、不定詞／動名詞の選択に関しては、どの動詞が動名詞、どの動詞が不定詞といった具合に、動詞項目別にリストとして学ぶというのが一般的と思われるからであり、このことは上述の通り、本調査の結果によって支持されている。

さて、全体の66%がリスト式学習を学習方略として挙げている。suggest との関連でいえば、動名詞を選び正答した21%の全員が、また、不定詞を誤って選択した人の約半数が、「リスト式学習」で不定詞／動名詞の選択について学んだと報告している。これは興味深い事実である。リストで個別事例を正しく覚えたのであれば、誤用は生じないはずである。しかし、ここではその誤用が際立った形で現れている。このことは、リスト式学習が、この種の問題に対処するにあたって、正答よりむしろ誤答に導くこともあり得るということ、より正確に言えば、誤った判断を防ぐ手だてとして機能しない場合もあるということの意味している。ここにリスト式学習の限界が示唆されている。

リスト式学習が誤用を誘発したとするとその考えられる理由は、リスト的に暗記した内容(記憶)が変容したためである。不定詞を目的語にとる動詞のリストには **suggest** は含まれない。にもかかわらず、多くの学習者は、**suggest** をそのリストに追加し、不定詞の誤った選択を自信をもって行っている。そして、そこに徹底を欠いた指導(学習)の仕方が触媒として負の作用を増大させ、誤った記憶を安定化させるのを促進させ、結果的に、ある種の化石化現象を生み出してしまっているという可能性がある。

徹底を欠いた指導(学習)とは、この場合、意味的な動機づけに言及することなく、単に「不定詞は未来志向」といった情報を提示することをいう。正しくは、未来の事柄について語るにしても、ある行為の遂行を想定してその「行為と向き合う」状況がイメージされるときに不定詞を使い、その行為を完全に名詞概念(想念やアイディア)として捉える場合には動名詞を使うのである。

不定詞の“to + do(動詞の原形)”という形は、動詞の原形がある行為を示すとすれば、「ある行為と向き合う」という意味合いになる。「向き合う」というのは前置詞 to の本質的な意味であり、それが不定詞にも生かされていると考えられるのである。動名詞の語尾の ING 形は、動詞を名詞化する印であり、その語形が名詞概念を示す(動詞的性質よりも名詞的性質がより強い)ことが明白だが、それとは対照的に、to do はあくまでも「行為と向き合う」という形であるという意味で動詞的性質がより強いという相違がある(田中・武田・川出, 2003; 田中・佐藤・阿部, 2006; 佐藤・田中, 2007)。この種の使い分けの原理を踏まえることなく、単に「不定詞は未来志向」と指摘するのみだと、「未来の事柄は不定詞」といった誤った推論を防ぎにくくなってしまう。その結果、未来の状況を想定する文脈で、不定詞を使い過ぎ、動名詞を使い残すという状況が生じてしまうのではないか。また、不定詞が未来ならば、動名詞は過去のことを表すはずだといった不正確な捉え方までもが生じてしまうとしたら、それも意味的動機づけに基づく使い分けの原理が考慮されないためではないだろうか。そして、この種の不正確であったとしても単純で図式的な把握の仕方が、リストを使って学んだという事実に関する記憶と相互に支え合うように作用して、学習者に誤った知識に対する根拠のない自信をもたらしてしまっているのではないだろうか。

ここでの仮説的な考察の妥当性チェックをするため、本調査では、参加者に直接、選択の根拠を自由記述方式で記すように求めた。自由記述であるため、種々の語り口があるが、内容分析を行うに当たり、いくつかのカテゴリーを設けた。それは、「感覚」「記憶」「成句」「未来」の4つである。「感覚」とは、「なんとなく」「そうだと思ったから」などの直感的判断に関わる記述を含むもので、「記憶」とは「そう覚えていた」「そう習った」など、保持されていた記憶に言及しているとみなされるものをそれとした。「成句」は、「決まり文句」と記してあったり、「**refuse to do**」「**mind + doing**」などの具体的な表現のつながりをあえて指摘している場合。「不定詞は未来のことを表すから」「まだやっていない事柄だから」のような記述は、「未来」という範疇に分類した。

以下は、ここで事例として取り上げている **suggest** において、参加者はどういう根拠で不定詞あるいは動名詞、あるいはその両方という判断を行ったかを示したものである。

表2 suggest + 目的語の選択と根拠

選択肢	感覚	記憶	成句	未来	(空白)	総計
to do	3.2%	16.1%	1.6%	16.1%	37.1%	74.1%
doing	1.6%	11.3%	0.0%	0.0%	8.1%	21.0%
両方	0.0%	1.6%	0.0%	0.0%	3.2%	4.8%
計	4.8%	29.0%	1.6%	16.1%	48.4%	100.0%

少数派であるが、動名詞を正しく選択した者の場合、「記憶」がその主な根拠となっている。しかし、多数派の不定詞を誤って選択した者の場合にも、やはり「記憶」がその根拠として目立ち、それに「未来」が加わっている。確かに、suggest は質問紙の用例からも判断できるように、「未来の事柄」に言及する動詞である。しかし、「未来の事柄」がすべて未来志向的な不定詞で表現されるわけではない。「記憶」を根拠に不定詞を選んだ人も同比率で見られるが、その「記憶」とはリスト式学習による不正確な情報であったかもしれないし、不定詞の未来志向に関する漠然たる記憶であったかもしれない。

ここでの問題を学習方略に関する問いへの回答状況と対応させてみると、見えてくることがある。すなわち、選択の根拠として「未来」を挙げた者は10名いたが、そのうち9名が「学習方略」として「不定詞の未来志向性」を選んでいる。ということは、彼らは、過去において「不定詞は未来志向的である」ということを学習していたということである。また選択理由を記述しなかった23名のうち半数近く10名が「未来志向」について教わった(学んだ)としている。

以上のことから、この調査に参加した学習者の動詞の目的語としての不定詞／動名詞の使い分けの習得度は、不定詞／動名詞に関して受けた指導(行った学習)の仕方(学習方略)に影響を受けている可能性が強いことがわかる。ここで看過し難いのは、リストで覚えた記憶内容が「不定詞は未来志向的である」という学習方略により誤った方向に変容している可能性があるということである。これは、指導の「不徹底さ」という問題とも繋がっている。すなわち、「未来の事柄は未来志向的な不定詞で表現する」という不十分な一般化を誘発することにより、suggest doing と暗記していたものがどこかの時点で suggest to do に変容する要因となり得るのである。さらにいうなら、「未来の事柄は未来志向的な不定詞で表現する」という不十分な一般化を根拠として抱くことから、suggest to do という誤った表現を自信を持って選択するという事に繋がるのである。ここで求められるのは、「徹底した指導のあり方」であるが、その可能性については、以下で考えてみたい。

4. 教育的示唆

今回の調査からどのような示唆が得られるであろうか。1つには、リスト式学習の限界と意味的動機づけの必要性を指摘できよう。ここでいうリスト式学習とは、知識項目をある範疇にくくり、それをリストとして示して暗記を促すという類のものである。例えば、以下に示す *Oxford Learner's Grammar* (Eastwood, 2005, p. 138) が掲げる動名詞をとる動詞リストなどもその典型である。

admit, allow, avoid, consider, delay, deny, detest (=hate), dislike, enjoy, can't face, fancy, finish, give up, can't help, imagine, involve, justify, keep, keep on, mind, miss, postpone, practice, quit, resist, report, resent, resume, risk, suggest

この種のリストは、概して、意味的動機づけが考慮されないために、機械的な暗記作業を誘発しやすく、結果的に不十分な習得状況をもたらす可能性が高くなると思われる。この種のリストに頼って記憶したとしても、なんらかの理由で記憶内容が正しい情報から逸脱して、それが長期記憶化してしまうことも容易に起こり得るであろう。結局、意味的な動機づけを欠いた用法のリストというのは、母語話者の言語使用の実態のカatalogに過ぎず、学習者が目標言語において新たな概念を形成するのに役立つものではないのである(Petrovitz, 2001)。

このことを踏まえて、むしろ、意味的動機づけに配慮した指導・学習の方法を可能な限り追求していくべきであろうと思われる。Larsen-Freeman(2000, 2003)も従来の文法指導の問題点に留意しつつ、学習者に「なぜそうなっているのか?」という原理的な説明を行うことの必要性を強調している。たしかに、文法現象のすべてに対して「なぜか」を明示できると主張するものではない。文法現象の中には、三人称・単数・現在の動詞語尾 *-s* のように論理的説明を受け入れ難い慣習もある。また、文法項目の性格の相違によって明示的指導の効果が異なる可能性も指摘されている(DeKeyser, 2003 ; Lightbown & Spada, 2006)。しかし、本研究で論題としている動名詞と不定詞については、それぞれ *to do* と *doing* という語(形)がもつ意味に注目するという方法が有効であろうと思われる(佐藤・田中, 2009)。この語彙文法的な分析によれば、不定詞は前置詞と共通する *to* を含むことから、前置詞 *to* との連続性において不定詞の意味の本質を理解することが可能となる。「対象と向き合う」をコアとする前置詞の *to* が不定詞に応用されると、それは *to* に動詞の原形を従える形であることから、「行為と向き合う」という意味合いになる。この「行為」が概してこれから遂行されるべきこととして捉えられることから、不定詞は一般に未来志向的な意味合いをもつことになるのである。しかしここで、なぜ未来志向になるのかという原理的な説明が欠けてしまうと、「未来志向」が不定詞理解の指標として一人歩きしてしまい、柔軟な使い切りや使い分けの原理が得られなくなってしまうという憾みが生じる。これとの関連で言えば、例えば、*fail to do*, *manage to do*, *refuse to do* などの用法も、「行為と向き合っ」いかに対応・対処する(した)かを語る表現と捉えれば不定詞の用法としても自然と理解されるであろう。単に「未来志向」とするだけでは、理解はさほど容易ではなくなってしまうように思われる。不定詞の *to* は前置詞の *to* と意味的に連続性を有しており、前置詞の「対象と向き合う」が不定詞の「行為と向き合う」へと展開され、それがいわば空間から時間へと比喩的に拡張されることによって、未来志向性が生じると捉えることができるのである。

一方、動名詞の *ING* は、現実の行為の文脈から離れて行為を抽象化して名詞概念として捉えたものである。そこで、不定詞が概して未来志向的であるのとは対照的に、動名詞は時間的には中立的になり、過去・現在・未来のいずれをも志向することが可能となる。過去を志向すれば、主に「～していることの記憶」を意味し、*I remember seeing you somewhere before.* などの用法が可能となる。また、*Would you consider joining us?*

のように、未来を志向して、提案や想念の中身としての「～していることの想定」を表すことも可能となる。しかし、未来の事柄に言及するとは言っても、遂行が想定された行為を示す不定詞とは違って、動名詞ではあくまでも名詞概念として捉えられているという理解が肝要である。

今回の調査で特に注目したのは、**suggest, consider, imagine** などの未来志向的な意味合いをもつ動詞の目的語情報を選択する際、これらの動詞の「未来志向性」という意味的性質から連想が働いて、誤りであるはずの不定詞の選択が促される傾向が生じ、本来選択されるべき動名詞の使用には抑制がかかってしまうという傾向性についてであった。不定詞を単独で指導する際には、「未来志向」と指摘するのは確率論的には間違いではないし、問題が生じない場合が多いと言えるかもしれないが、動詞の目的語情報として不定詞／動名詞の選択が求められる状況では、上述のような語彙文法的なアプローチに基づく、より洗練された説明の仕方が要請されるのではないだろうか。

5. おわりに

本研究では、動詞の目的語としての不定詞／動名詞の選択において、日本人成人英語学習者が習得に困難を見出すのはどのような項目においてであるか、また、英語習熟度レベルの相違によって、その難しさに質的・量的な差が生じるのか、不定詞／動名詞について学習者はどのように教わって(学んで)きたか、学習者の理解の仕方が不定詞／動名詞の選択に影響を与えているか、について実証的に検証を行うことをねらいとした。

調査を通じて、未来志向性を帯びて行為が肯定的にイメージされるときに動名詞を目的語に用いる動詞(**consider, suggest, imagine** など)が特に習得され難い項目となることが想定されるということがわかった。英語習熟度レベルの相違との相関もある程度みられ、習熟度が相対的に低い方が動詞の目的語における不定詞／動名詞の使い分けもより習得され難いことが見て取れた。ただし、項目によっては、英語習熟度レベルの相違にかかわらず習得され易い項目(**mind, promise, avoid, remember, hope, miss, deny**)や習得され難い項目(**suggest, imagine, consider, refuse**)もあった。

学習方略については、動詞の目的語における不定詞／動名詞の選択に関するリスト式学習法が普及していることがわかった。この方法は必ずしも正しい知識の定着に貢献するとは限らず、むしろ、なんらかの理由で本来とは異なる誤った情報を長期記憶化してしまうことがあり、その過程における触媒作用をもたらす要因として、意味論的に徹底を欠いた単純で図式的な指導(学習)法が関与している可能性があるという考察が得られた。

教育的示唆としては、リスト式学習の効用に限界があることを認識し、意味的動機づけに配慮した文法指導の仕方を考慮することの必要性を指摘した。動詞の目的語において不定詞／動名詞の選択が問われる状況では、語彙文法的な視点から2つの表現形式の本質的な意味を踏まえつつ指導することが要請される。この種のメタ言語的説明を学習者に施す際には、情報提示の方法が重要な変数となることは言うまでもない。言語による明示的説明だけでは必要以上に複雑な印象を与えかねない。そこで、身体感覚に訴えるという利点をもつ認知的な手法によって、視覚的なデバイス等を効果的に使うなどして、用法の特徴や相違を実感しやすい指導の仕方を追求することに相応の意義が生じるであろう。その具

体的な内容を構想することは今後の課題である。

参考文献

- DeKeyser, R. (2003). Implicit and explicit learning. In Doughty, C.J. & Long, M. E. (ed.), *The handbook of second language acquisition*. Malden, MA: Blackwell.
- DeKeyser, R., & Juffs, A. (2005). Cognitive considerations in L2 learning. In Hinkel, E.(ed.), *Handbook of research in second language teaching and learning*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum, 437-454.
- Eastwood, J. (2005) *Oxford Learner's Grammar: Grammar Finder*. Oxford: Oxford University press.
- Ellis, N. C. (2005). At the interface: Dynamic interactions of explicit and implicit language knowledge. *Studies in Second Language Acquisition*, 27, 305-352.
- Hornby, A. S. (1976). *Guide to Patterns and Usage in English* (2nd ed.). Oxford: Oxford University Press.
- Lantolf, J. P. (2007). Conceptual knowledge and instructed second language learning: a socio-cultural perspective. In Fotos, S., & Nassaji, H.(ed.), *Form-focused instruction and teacher education*. Oxford: Oxford University Press.
- Larsen-Freeman, D. (2000). Grammar: Rules and reasons working together. *ESL/EFL Magazine, January/February*, 10-12.
- Larsen-Freeman, D. (2003). *Teaching language: From grammar to grammaring*. Boston, MA: Thomson/Heine.
- Lightbown, P.M., & Spada, N. (2006). *How languages are learned*. Oxford: Oxford University Press.
- Petrovitz, W. (2001). The sequencing of verbal complement structures. *ELT Journal*, 55, 172-177.
- 佐藤芳明・田中茂範 2009.『レキシカル・グラマーの招待——新しい教育英文法の可能性』開拓社.
- 田中茂範・武田修一・川出才紀監修 2003.『E ゲイト英和辞典』ベネッセコーポレーション.
- 田中茂範・佐藤芳明・阿部一 2006.『英語感覚が身につく実践的指導 ——コアとチャンクの活用法』大修館書店.